

男女共同参画学協会連絡会の第10期幹事学会をつとめて

男女共同参画推進委員会委員長，国立医薬品食品衛生研究所薬理部長 関野 祐子

本稿の執筆にあたり，まず日本生理学会の会員の皆さまに，第3回大規模アンケート「科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」への御協力につきまして御礼申し上げます。お陰様で，日本生理学会の回答率（会員数比）は20.8%でした。回収率のトップは発生物学会で，34.6%でした。

トップ10は24%以上の回収率でしたので，トップ10に入れなかったことは幹事学会としては少々残念ではありましたが，締め切り直前の「あと60人！」の呼びかけに答えていただき，なんとか20%を突破しましたこと，御礼申し上げます。また，アンケート実施に関しては，日本神経科学学会の男女共同参画推進委員会の吉村由美子委員長に協力していただき実施にこぎつきましたことを，この場をお借りしてご報告いたします。現在，第11期の幹事学会である日本動物学会が中心となって，回答結果の解析作業に取りかかっています。第1回アンケート調査から10年がたち，男女共同参画関係の種々の施策がどのような効果をもたらしたかが解析できるということで，内閣府，文部科学省から解析結果に対する期待が寄せられています。

さて，私は水村和枝先生の後を引き継ぎまして，平成24年の4月より日本生理学会の男女共同参画推進委員会の委員長を務めさせていただいております。今回私たちが幹事をつとめた男女共同参画学協会連絡会（以下，連絡会）は，理工系の学会協会の男女共同参画に関係する委員会の相互連絡を目的として平成12年に設立されました。日本生理学会は設立時の正式加盟メンバー（14学会）であり，第10期の運営を引き受けることになりました。現在では正式加盟学協会が50，オブザーバー参加学協会が24，加盟学協会会員数は約

41万人にもなる巨大な組織です。運営委員長としてこの組織を1年間統括するお役目は大変な重責でした。しかし，岡田前会長と三役の御支援と，栗原会長の新体制によるご支援をいただき，また日本生理学会の広報のためとの自負を持って，なんとか頑張ることができました。そして，昨年10月7日の10周年記念シンポジウム（於：東京慈恵会医科大学）の開催をもちまして，無事に幹事の任期を終了いたしました。しかしつい最近まで，報告書の作成や，11期幹事学会（日本動物学会）への引き継ぎなどに忙殺されておりました。そのため，本稿での学会員の皆様への御礼が遅くなってしまいましたこと，お詫び申し上げます。

連絡会の運営委員長として非常に多忙な一年を過ごしましたが，いろいろな経験を積むことが出来ました。運営委員長は，内閣府が主催する男女共同参画推進連携会議の議員となります。年に2回ほど，官邸で開催される全国の男女共同参画関連団体が集まる全体会議に出席します。官邸に足を踏み入れるというのはそれだけで少々楽しい経験です。不謹慎かもしれませんが，ここは首相がインタビューを受けるところだなあなどと，観光気分になってしまいました。全体会議の前に，各議員は小委員会に分かれて，その年度のトピックスを議論します。私はポジティブアクション小委員会に属しました。現在，我が国の男女共同参画ポジティブアクションの数値目標は，女性管理職30%達成です（http://www.gender.go.jp/main_contents/category/positive_act/positive.html）。各団体がどのようにその目標値達成のための努力をしているか，また，女性管理職の積極的登用によりどのように業務成績が上がったかなどを報告しあいました。私が所属している国立医薬品食品

衛生研究所では女性部長が35% (20人中7名)であり、特に数値目標を意識したしくみは作っていないことを報告しました。なぜ達成できたかの理由を解析するのは難しいと思います。しかし、3年前に大学から異動した私の個人的な印象をいえば、やはり国家公務員は大学のポストとは違って安定した職種であり、特に我々の研究所に関しては転勤がなく、内部昇格が出来る、などが大きな理由であると思います。つまり、人生設計を建てることのできるのです。女性が子育てなどで一時的に十分に活動できなかつたとしても、復帰したあとの土俵が変わりませんから、業績を挽回出来る機会に恵まれるわけです。これらのことは、大学を異動しながらの昇格が通常となっている今の大学のアカデミックポジションと大きく違います。ただ、この実態は分野によって異なるようです。

第2回大規模アンケートの解析結果 (http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/2007enquete/h19enquete_report_v2.pdf)によると、任期のない常勤職についている研究者の割合は、他の系の学協会では男性は80%以上、女性は約70%にもなるのに、生理学会も含まれる生物生命系の学協会に所属する研究者では、男性56%、女性42%なのです。驚きました。我々生理学の場合は、生理学系の研究室が医学部において激減していることが関係しているのではないかと思います。博士号取得から、非正規雇用のポスドク、任期付き助教、そして、准教授になっても教授になるために異動する。これではいつ生活設計を書くことができるのでしょうか。このような状況でのライフ・ワークバランスの推進は難しいと思っています。雇用の問題は男女共通していますが、女性研究者を積極的に支援していただく必要があるといえる点がいくつかあります。男性研究者の配偶者の半数は無職であるが、女性研究者の配偶者の98%は有職者である。こういう数字からみて、子育ての時期に安定した環境で研究できるポストを充実させる努力は、女性研究者に対してより重要になってきます。女性研究者の、子供のいる割合や、子供の数は、男性研究者に比べて圧倒的に低いのです。その他、

女性研究者の単身赴任の経験率が高くなっています。これらの現状から同居支援を求める声が上がっています。何か良い施策の案が有りましたら、およせください。研究環境に関しても、講師以上のポストへの女性の採用率は低いまま推移しており、獲得研究費についても、年齢が上がるにしたがって格差は広がっています。女性研究者は大型予算をとりにくいという実態を示す数字です。これらは5年前の解析結果です。5年後にどうなってきたかはこれからの解析を待って、またご報告したいと思っています。

男女共同参画の活動はそのまま国の施策に関係するために、民主政策調査会主催のヒアリングを受ける機会がありました。テーマは「女性研究者の就労継続」についてでした。高松副委員長と白尾副委員長とともに出席して、発言時間をいただきました。その時に担当の代議士の方と名刺交換し、またその後のパーティーなどでお話をする機会があり、研究者の同居支援の話を行いました。しかし、そのような交流も政権が変わってしまえば水の泡だったようです。何事もタイミングですね。

幹事学会としての事務運営は、加盟学協会主催のシンポジウム後援、加盟申請の審議、名簿やメンバーリングリストの整備、加盟学協会からの調査データ収集、運営費やシンポジウム参加費の会計など、ありとあらゆる雑務が発生しました。これらの雑務は生理学会の男女共同参画推進委員会のメンバーで分担して作業しました。男女共同参画推進委員の皆さまに本当に感謝しています。また生理学会事務局の方にも協力していただきました。今は亡き滝さん大変にお世話になりました。この場をお借りして、ご冥福をお祈りしたいと思います。

シンポジウムは、連絡会のメインのイベントです。シンポジウムは成功裏に終わりましたが、我々生理学会が提案した「科学・技術における性差」というテーマは、連絡会の一部で物議を醸しました。我々の考えている性差とは、純粋に学問的なものであり差別とは違うのだということを議論したこともあり、フェミニズム、ジェンダーなどについて



写真1. シンポジウム開会の祝辞：栗原会長

てこれまでにないいろいろと考えさせられました。シンポジウムの貴邑富久子先生の講演「脳の2つの性—セックスとジェンダー」はまさにこの問題を学問的にとらえた興味ある話題でした。シンポジウムの当日は、慈恵会医科大学の竹森教授の研究室の皆様、生理学会若手の会の皆さまと、生理学女性研究者の会の皆さまに大いに助けいただきました。有り難うございました。

思い起こせば、怒涛のような1年間であって、慌ただしく終わってしまいました。男女共同参画



写真2. 平成24年10月7日 第10回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムを終えて。

の活動を通じてたくさんの学会の人達と異分野の交流があったこと、そして学会員の皆様との絆を感じる事が出来たこと、様々なことに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも男女共同参画推進の活動に関しまして、会員の皆様のご理解と、ご支援をお願い申し上げます。

参考：

男女共同参画学協会連絡会ホームページ <http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>